

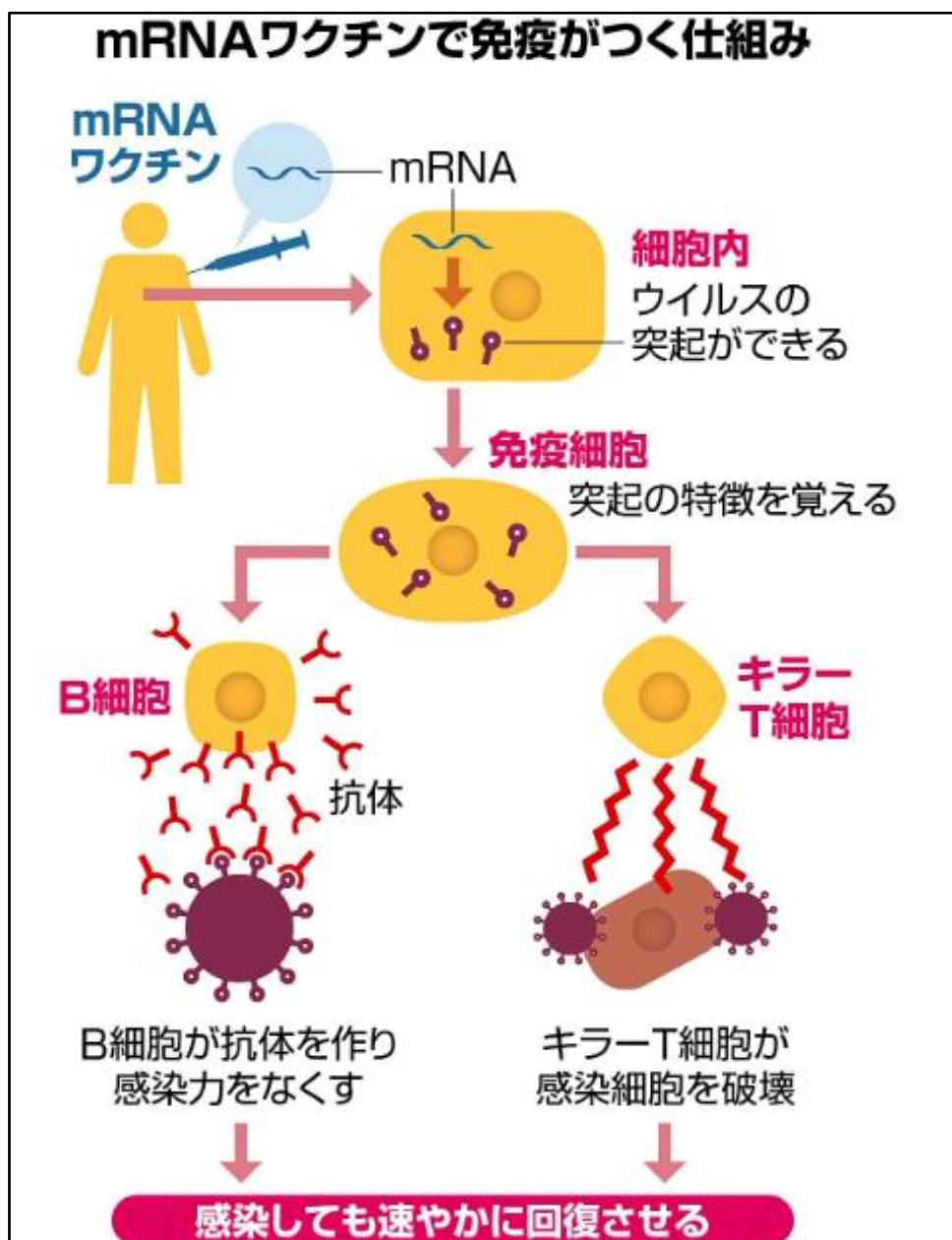
ワクチンの役割って何？

読売新聞

体には侵入した病原体を攻撃して、体を守る「免疫」がある。病原体の特徴を免疫細胞が覚えて、2回目からは素早くやっつける仕組みだ。ワクチンはこの仕組みを利用して、発症や重症化を防ぐ。

新型コロナウイルスは、表面に「突起」があり、ワクチンは突起の形を免疫細胞に覚えさせる役目を果たす。そのため、米のファイザー製・モデルナ製のワクチンは、人の細胞に突起部分を作らせるための設計図（遺伝物質 mRNA）を含み、英アストラゼネカ製は、突起の遺伝物質を別の無害なウイルスで人の細胞に運ぶ。

2回目の接種から1～2週間たつと体の中に大量の抗体ができ、防御態勢が整う。mRNA ワクチンの従来株のコロナウイルスに対する発症予防効果は約95%で、重症化も1割未満に減らすとされる。



変異ウイルスとは？

新型コロナウイルスが体に入ると、表面の突起を人の細胞にくっつけて、ウイルスの遺伝情報（設計図）を送り込み、細胞にウイルスを大量にコピーさせる。たまにコピーミスが起きて生まれるのが「変異」ウイルスだ。

大半の変異は問題にならないが、突起の重要な部分に変異が起きますと、感染力が強まったり、体内で爆発的に増えて重症化しやすくなったりする。

感染力が強い変異ウイルスが生まれると、流行する株が置き換わる。国内では2021年5月に、従来株から英国由来の「アルファ株」に、8月には新規感染の推定9割以上が「デルタ株」に置き換わった。デルタ株の感染力は従来株の2倍、アルファ株の1.5倍といわれている。

